

KURENAI

くれなゐ

第39輯

畑づくり……………前川 佐美雄
 綏遠の月……………石川 信雄
 牡丹明るく……………見原 文月
 青春手記(一)……………石川 信雄
 積日に學ぶ……………池田 道夫
 アクロバット論……………杉原 一司

塚本 邦雄 難波 禮二
 新井 康彦 行則 十四子
 鍵岡 正義 平井 惠美
 岸本 光治 吉田 鶴
 吉田 辰雄 生島 資子
 山口 實 笹井 善治
 山下 富子 吉井 香代子
 塚本 慶子 北川 和歌子
 加藤 英之助 埜中 清市

第四卷第五號

昭和二十三年七月二十五日印刷
 昭和二十三年八月一日發行

くれなゐ 第四卷第五號 通卷第三十九號

昭和二十三年七月二十五日印刷
 昭和二十三年八月一日發行 歌誌くれなゐ 第三十九號

編集後記

○漫画やエロ本と同じ卓子に並べられてゐる多くの文藝雑誌の編集後記にも必ず我が天下の如く書かれてゐる。尤もだと感心させられる。表紙はまばゆい位、記事は満載、大變結構である。だが一流と思はれる雑誌にした所で「讀みたい」とワシツカミにして求める雑誌の全くないのが不思議である。○大宰が死んだから、彼の作品をよみ返してみたいと念じ、晩年の作品をよめる。生きてゐた時にも讀みたい作家の一人ではあつた。誰も彼も、あの様な作家であつてほしい。論するまでもなく、彼にはそれだけの力があり、作品に魅力があつたのだ。

歌集 饗宴

前川佐美雄

B6 二四六頁
定價 百 円

奈良市三條町
三興出版部

年刊詩集

昭和二十三年版

月5判・美装カバー付
頒價一〇〇円(送一〇〇円)

部數制限のため直接又は最寄書店にて御豫約を乞ふ

奈良縣高市郡八木町
爐書房

謝くれなる基金寄贈
梁 雅子氏 北川和歌子氏

くれなる通信

▲當分隔月に發行することは御通知した通りです
▲本號には前川、石川、見原諸氏の作品を戴きました。
尙「青春手記」は「シネマ」發行之昭和十年頃に書かれた懐かしい舊稿です。
▲原稿は必ず二十字詰原稿用紙使用のこと。
▲歌は二十七字以内にする。右肩に「くれなる原稿」と朱書。原稿は必ず楷書にて書くこと
▲通信連絡送金は必ず發行所宛にして下さい。
▲新入會希望の方には規約をお送りします。(要送料)

▲次號原稿締切、八月二十日

くれなる 39 頒價 十五円(送五円)

編輯兼 埜 中 清 市
 發行人 埜 中 清 市
 印刷所 吉 川 富 治 郎
 印刷所 朝 日 堂
 發行所 くれなる發行所
奈良縣高市郡八木町 埜中

畑 づ くり

前 川 佐 美 雄

われはたと膝叩きしがあはれさよかかるよろこびも瞬間にして
あきらめて裏畑づくりしをるなり用あるひとは裏にまはり來
塵芥をさめし土のふくよかにこまやかなるを薔薇に運びて
さながらに首ぬけ箒に似つるよとかなしくなりて笑はむとする
若葉すでのびきりたれば草木らもだらりとしをり草木らも悲し

綏 遠 の 月

石 川 信 雄

綏遠に夕立すぎて土塀のうち大ひまはりのうなだれにける
雨すぎし綏遠の胡同出て見ればことごとく濡れし黄土くわつとの土塀
陰山の恒山に及ぶ雲の上から雷のゆきまたかへる
綏遠の高き鼓樓をつばくらが渦巻きめぐる夕べとなれり
綏遠のキャフェ^カアムウル^ルをいでしかばま緑の空に大いなる月

綏遠の鼓樓南街は樹をしげみ月かげささず唐黍を焼く
我がつれの加藤楸邨東京の妻を戀ほしむ厚和の月に

牡 丹 明 る く

見 原 文 月

朝ぞらに馬の足どり重たくてこの馬の顔長くいとしき
いろいろの人をおもへど春の夜の墨のねばりに筆をおきたり
雨天そらを烏地に降り羽根黒し烏のくせにその眼のしたし
わが息をよせてみつめる錦木の芽はひそかにて紅べにを生ずる
日食のすではじまるあまつ日に白き牡丹のおのきみゆる
日食の深みつつある晝ひかり牡丹の花びらを土よりひらふ
日食の食分極まるいまのいまも人貪慾に往來止めず
兩側の牡丹明るく長谷寺を詣ひ下りくるはら姪めみ女ひとり

青春手記(一)

石川信雄

序

休刊され、前川佐美雄も奈良にかへつた年である。

算術。

彼等二人が結合した時、彼等は十人になつたやうに見えた。(三月)

私は私を知るために書く

私が二三のイシキされたテエマを持つて書き出すのは、書いて行くうちに、自分でも氣づかなかつた自分の他の部分をおびき出さうとするためである。

私は私自身の中に何人の私を養つてゐることか。

萬魂の人こそは眞の人間である。決して怪物とは言へない。そのやうな人を怪物呼ばはりする者は、實に人間のケラであるのにすぎない。

偉大な計畫の一端としてでなくては、何事にも手をつけ得ざる精神。

捨てて顧みなかつた若き日の手帖を讀んで何か不思議なコウフンを感じた。時間の堆積と自己インペイの無意識の努力の下にかくされて來た自分にもう一度出會つた喜びであらうか。それにしても十五年前と今の自分が餘りに變つてゐないのにはおどろく。特別に進歩のをそい人間なのであらうか。それとも性格など言ふものはその年代に形成され以後は大して變らぬものだらうか。十五年後の同じ年頃の人々がこの中からいくらかでも彼等と共通の問題を見出すだらうか。

最初にさし出すのは一九三三年(昭和八年)のノオトである。僕は數へ年二十六(滿二四—二五歲)で「シネマ」の歌を作つた時期はその前年及前々年に當る。「短歌作品」は

大人物を生むか、浮浪人を生み出す。

書く人としての出發。生きる人としての終焉。

隣室に下等な男がある。その男を無視することはできないが、そんな男のとなりに住まねばならぬと言ふ自分の運命は忘れられない。

素手ではじめること。あり合せの道具を使つて。

遠大な計畫きり立たないといふことも、確かに巨大な不幸である。特にさうした計畫がしばしば破れるのを見て來た上では。

ボオドレエル、ランボオ、バイロン、ワイルバを研究せよ。ゲエテ、モリエール、スタンダアルを研究せよ、ラシイヌとシエクスピアを研究せよ。

丁度にやるのかね。

友情とは公には長所をほめ合ひ、私的には知所を攻め合

ふことである。

友情は相手をかばふためにはえらい事をしでかす。例へば、ホラフキの友人を救ふためにとつてもない計畫を實行する、など

先づ人間であつて、次に藝術家であること。

藝術家たらんがために人間をやめること。

前者だけが偉大な藝術家である。

だが、おれは——?

今までの体験を早く藝術化してしまふこと。新しい体験にとび込むために。

(こんなことを書くのは、今までのものを書ききつてしまふことを實は恐れてゐるのだ)

しくじつてもしくじつても、なほ希望をきづき上げて行くこと。失敗したのは希望が悪かつたのではなく、無經驗から來た計畫のソロウにあるのだから。

冬の夜

田中克巳

稻はみな刈り取られ山々は紅葉した

大和國原に冬が来た

あたたかいふるさとを目指して翔ける鳥を追つて

どこか行きたくてたまらないがさて行先は？

あれこれと考へると長い夜を寝つかれない

宵のうちは春が来たらと晴着のことや

野邊に咲く花のことを云つてゐた子供たちはもう眠り

憐れに私だけが起きてゐる

春が来たなら？ 私はもう一つ老いるだけだ

それでも子供たちの喜ぶ顔が見られやう

それだけを楽しみに私も春を待たう——しかし

冬の夜のなんと長いことだ！

蜜月の睡りうるうる簡單な算術もわからなくなる草いきれ
微雨空がすり落ちてくるマリアらの薔薇色にひらく十指の
上には

昨日わがバベルの塔の崩れしとふりむけば地の果てまで青
葉

ここは詩人の死ぬ巻ゆる一ひらの花と焔が遺しおかれき
デカメロンの終りの朝のぬるぬると生卵のむ轉落公子

シャンデリアの下まで行つて引つかへす貴族のなれの果て
青蜥蜴

蜜月はきのふ終りて熟麥の穂中にひとり妻を坐らす

若葉より青葉に移るくらかりをかきさぐる妻が白きてのひら

日は書のうつつに君を抱きつつ睨まされて夜を待つものか
われの生命にふれにし君のまごろみのほのぼのと手股もつ
れてゐたり

石を蹴る

難波禮二

青葉かげ心さやかに濡れゆきて行きつきしところ神も在す

道白く村一筋につらぬける谿あひにしてわが家のあり

脱ぎ捨てしままの苦物がそれれ影もつ朝は朗らに晴れぬ

ひまあればつねに眼鏡を拭くくせのありて初夏はすするさ
みしも

視野せまき谿あひ部落の日の昏に一牛鳴けば二三よびかふ
すくはれず明日のさだめもくらしとこそ思ふたまゆら流星
ひとつ

この季節は

行則 十四子

夢に居しわれなき清き君に觸るる恐れて夜の露ふみぬ
優しくもなにを遂げむと手をととりしわが邪まぞかくて逃れ
えぬ

悪魔ならぬ我と血しほに頼みしが耐ゆる切なきの掌は罪す
あはれかつて美しき少年と言ふも思ほえばマリアの胸に抱
れし日なし

君をわれと生の歡喜にゆだねべし罪責はつゆ消ゆるにあら
じ
公園にベンチをもとめ下り來ぬこよひ聖者のごとくに弱し
曉に君に迫りぬし我を見き無慚にも血走りてひとり燃えぬし

女

孟蘭盆會

昆虫の翅の色どり描きみて都塵に籠る嘆き秘めたり

冷たき瞳を青く棘立てて生きねばならぬリラも咲く世に

エレジイの響そぐはぬ春の日に花に背きていつまで座せる

老いしもの禁慾は易からむ桃咲けば女蛇の舌はちろちろ
と炎ゆ

女ならば身をひさぐなりとふ言を聞き涙なく視る虚ろの草
爾え

荒みゆくところをもてる女ゆゑみどりの屋根のクロスも戀
ひぬ

牡丹雪降りそへて待つたらちねの一周忌なり還り來ましぬ

孟蘭盆會

巖岡正義

地の果の雲白きのみ目に入ればひとりひそかにみちをゆく
かも

この果にうつつともなく湧く雲の見ゆる限りを歩みゆくか
も

風さすが夕めきたれば緋にもゆるセラニユムさへすきと
ほり來ぬ

みよわが手今未にもむ夢の入り日淀み流れてわが未となる

雷
焼かれるる毛虫の臭ひのただよへばけもののごとく荒ぶ心
よ

竹林の青の芽えくる日のくれを雷とごころけば嘆きは言はぬ

放蕩といふ放蕩なさずおとなしく夏疲れぬるわれを憎めり

白き堀沿ひて下れる坂をゆきひとつ遠離のかなしみに耐ふ

暗き家に生きてまらぬる女なれば共に行く日の陽よ高照
れ

砂丘の高き陽の下はちらひは男にもありて眼を閉づ

沙羅双樹

吉田 鶴

盛り咲く野ばらの柵につま立てば野のめぐりすずに春のい
やは

いつよりか弱きを告げる弟の心ひびきてうるむ夕やけ

葍もつギヤマの皿のふとふるふ病むと聞く日の吾が立居な
る

土蜂の巢をたたかむとする童等の心むごさをにくみつ居
り

旅・青葉

平井 惠美

からまつ芽吹きほのかに師の君の老い給ふ國ははるかな
るかな

何もちて生きむいのちと時折は夢よりとほき人も思へり

野の果に地平線のみ青き日はこころうつろにひと思ふかな

青芝を目くるめくがに徹る日の愛しきるかも淡き疲れに

雪の夜に息ひきとりしたらちねの靈とおもひて雪を掬ひぬ

日輪の動きを知らず寂しさにただおぼれる母の墓訪ふ

秋雨に濡れてや細くひびを入り母の墓標は古びたるかな

宗教の廣大無邊の愛を説く父の禿頭いよよ光りぬ

温和しき叔父はなほさらものはぬ佛となりて還り來にけ
り

還るべき人は還らずとこしへに比島の土となりて鎮まる

永へに生きたまふべしたらちねの御靈をともし捧げてゆか
む

悲しきをなぐさむるべき言葉なく尋常にかきし弔問状あは
れ

世は同じ世と思はれぬ世に生きて母のみ靈をおろがみまつ
る

短かる母のいのちを雨だれの音と較べてなみた流るる

九年母のゆくえ知らずもろろを轉びて一つまた一つ落つ
靈かへる傳説あはれに思ほゆ孟蘭盆會ともなりにけらしな
祖母は先づ佛具磨きに精出して新精靈を迎へむとする

パイプオルガンの律動が肌に沁むときは愛しきことの一途なるかも

生き死にのはかられがたし六月の光に照りかへす石路のつゆ

青梅の落ち来る音や待つことの望みもつひのかなしみなるか

何故にそないかなしい顔をするうつつにのぞく野の井戸の底

山百合の見えかくれして向く夏の山にある日の心きはまり再び逢はんことさへ思はねば野はきんほうげの冷やかさなり

沙羅双樹遂げぬひとつの野望もち地の片隅に果つるは云はず

少女 尼 吉田辰雄

しとやかに衣まとへる少女尼奥の細道に春忘れしや

みやまじのさざりとさせる夕まぐれ彌陀の灯かげに若しと思へ

かみそりし身をはかなみてなくと言ふうら若き尼よ早く忘れよ

みやまじに木魚をたたく業かも生れ來し世をなぜにすねたる

失戀に山寺にいりし少女尼むかしのひとのとむらひをしぬ

夏 帯 生島資子

夏帯をきつく締めたり碎かるれど碎かるれど朝の思ひは正しぬ

やすらかにのませかし母よ、み腫を玻璃洩る月にみひらきたまひ

母につながらほのぼのと幼時の思ひ出よ土地の祭を見にきたりけり

わが心君を思へる一つよりあらざるままの一途に死なむたゞにわが愛すまことを疑はね燃え求めゆきて苦しかりける

胸底は濡れるつつ笑みぬ今宵父のよはひ歎かす言をうけとめ

何気なき對話なりしを君がことに觸れゆきていたく心みだれぬ

われに笛りようりようと憎みもいつはりもなく人集ふ笛吹かな

聲低く讀むはグゲテか、もはやわが及びえぬ弟のまみの愛しも

まもりつついとしむ思ひのせきあぐをもはやその日の姉を拒むや

わが胸に日月はてなく流るるを面影いづちにゆきたまふ夫

墓原は明るし夫の墓石に觸れぬるは薔薇の珠實なるかも

「積日」に學ぶ

—寫實的ロマン主義

といふ言葉について

池田道夫

今本誌で歌集『大和』の合評が行はれてゐる。新しい短歌の源泉を『大和』に求めようとする態度——それは如何にも正しいと言はればならぬ。まことに『大和』一卷こそ昭和初期の結晶として飛び散るやうな情熱と詩魂にあふれてゐる。そして吾々の中にも、この『大和』より出發して自らの歌を發展させて行かうとする人達が多い。しかし私個人としては、私が前川門下に入ったときは『積日』後半の『零滴抄』の書かれてゐた頃であつた。その頃の歌會で新作として『積日』後半の歌が盛に發表され、『積日』的議論に立つて教示を受けた私は、自らの血につながるこの歌風に多分の感化を受けたことは事實である。實際、『積日』こそ『大和』等とは全然別の意味で、現在の歌壇に一大センセーションを捲き起すに充分なる歌集である。ところが愚昧なる歌壇は、自らの無才の故に遂に一部の活眼の士を除いて、又かの『白鳳』や『大和』と同様、暗中に葬り去らうとしてゐる。去る日に於て『新しき戀情』を暗々裡に葬り去つた文壇に對してその愚劣さに憤懣やる方なく而も又名著『虚妄の正義』を「著者は自分に謙遜であり、あまり多くの自誇を持たない。しかしながら比較に於て、この書は多くの問題に富み、すくなくとも一頁が、他の凡百の書の百頁に當つて居る。著者はそれを確信する。にもかかはらずこの書も、前と同様の運命から日本の文壇者流に理

解されず、寂しく黙殺されてしまふのである。著者は百の襟懐を感じつつ、この書もまた、街上に叩きつけて出版する。『虚妄の正義』序と絶叫して敢然刊行された萩原朔太郎先生の憤りを、そのままこの愚劣なる時代故に受けられぬ天才歌人の心として、私は一つの正義感から愚筆を執らざるを得ないのである。いつか前川先生が『大和』や『天平雲』の時代は過ぎたといふやうなことを言つて居られたのを覚えてゐるが、たしかに私はそう思ふのである。すでに時代が違ふ、建國以來未曾有の「敗戦」といふ悲愴なる時期を通過して來た私達は、もつともつと人生に對し、而して自然に對してリアルになつてゐるはずだ。もつともつとさめ切つてゐるはずだ。しかるに、『白鳳』や『大和』の時代よりも猶格段の峻厳な時代に生きてゐる青年が、時代の反影なき安易な耽美主義に溺れ、又『大和』をヒン曲げたやうな馬鹿げた空想歌を連發して得々としてゐるのを見ると、私は切實に『積日』の眞實を學ばねばならぬと思ふのである。

かくして『積日』を見ると、その後記に明示されてゐる「寫實的ロマン主義」といふ言葉に心ひかれぬ人はなからう。そこに掲載されてゐる新しいロマン主義の短歌によつて、戦後始めて明示されたきびしい詩魂に心打たれぬ人はなからう。たしかに在來の歌人の歌は「ロマン主義」か「寫實主義」か「ロマン的寫實主義」かであつた。（勿論現今傳染病の如く蔓延してゐる文明流の歌は詩歌の部類に入らぬから論外である。）「ロマン的寫實主義」のアドバルーンには綱がなく「寫實主義」の木には詩人に本質する痛烈なる飢餓ともえ上るやうな情熱がない。共に片手落の感で吾等には關係がない。又、

「ロマン的寫實主義」はどうか。これは今迄最も多く行はれて来た方法で、その元祖たる茂吉の歌を見れば本質の何ものたるかがよくわかる。今『赤光』の代表歌を挙げてみれば

白ふちの垂花ちればしみじみと今はその實の見えめししかも
ほのかにも通草の花の散りぬれば山鳩のごま現なるかも

共に「死にたまふ母」から採つたのであるが、これは、最初から作者のロマンの眼鏡を通して対象を見てゐるのである。そこはかとなく心にたゆたふ詩情の波にのせて客観を、己れを夢幻化して表現してゐる。ここには作者によつて夢のように美化された自然があるばかりで眞のリアルな眼にうつる正確な寫生がない。茂吉の言ふ「實相觀入」といふ言葉は、ここではまだ「實相」も「觀入」も行はれてゐるのではなく、ただ少年のやうな作者のロマンチックな悲しみがしたたつてゐるにすぎないのだ。故に「ロマン的寫實主義」は單なる「ロマン主義」の一面であるにすぎない。眞の「リアリズムの文學」は自己の内部にある甘つたるい詩人を無慙に虐にしてかかるところから出發する。萩原朔太郎先生の言葉を借りれば「言葉がすぐ韻文に舞ひ上つてしまふやうな」輕薄を最もさげねばならぬのである。ゲーテが晩年「若きエルテルの悲しみ」を厭惡したのもその爲であつた。と言つても勿論ここに掲出した茂吉の歌は左程甘つたれたものと思はれない。充分現代の讀者をも魅了するものは持つてゐる。しかし吾々はさうしてもここに沈溺してゐることは出来ない。この歌境のもつ甘さが鼻もちならないものとして感じられるのである。もつともつと徹底したりリアリズムの文學がほしい。もつともつと「大人の文學」がほしいのである。

らぬ歌人ならざる歌人の集合体に化してしまつたが故に、初から詩歌の正道を正しく歩みつづけて来た一團より今ははるかに遠ざかり、その辛苦の結晶より生まれたこの歌集の示す言葉さへ馬耳東風と聞き流すのは無理からぬことである。しかし純粹の詩人の血をうけてゐる歌人には、「寫實的ロマン主義」こそ至上の言葉でなくてはならない。この大いなる感謝の心で最後に私自身の勝手な欲望を言はせていただきたい。

——ああ、私は『積目』の眞實の上に立つた『白鳳』や『大和』的パッションがほしい——。

アクロバット論

杉原 一 司

あくどい迄にきらびやかな天鵝絨の服を着て、曲藝師（アクロバット）はするすると一本の竿をかけるやうにして登つてゆく。そのあとを追つて、まだ二十才にもならぬ少女が登り、八方の鋼線に支へられた鐵棒を芯とする梯子の兩端に二人は腰をおろす。いま彼等は互ひに顔を見合はせ、かるくうなづきあひしづかな笑みか交換してゐる。目前にひかへた演技のために、心をたてなほし準備を進めてゐるのであらう。やがて一方が梯子のはしにしりぞく。するとその相手は呼吸をあはせて、胸をそらし重心を保たうと努める。そんなことをいくたびかくり返したのち、少女のアクロバットは梯子の端にあやふく立ちあがる。觀衆のあひだに木の葉のふれあふやうな

さてそこで『積目』の歌を見よう。

とどろきて汽車鐵橋を過ぎればその深き谿に咲く花も見ぬ
嵐過ぎて今朝ゆく道の砂かたし砂さよしひとつころにひびく
かなしみのわれの底ひを突き當てて或ひは錐を揉み込むおもひ
物言はぬわが目となりてしらじらと秋の河原の石にまじれる

ここには峻嚴なりアルが刃のやうにするどく存在し、あの鼻もちならぬロマンチズムは徹底的に虐殺され、あらゆる不徹底な抹殺して憂氣を含む一陣の牙の底に、思はずあふれ出る感動をじつと耐へてゐるきびしい人間像を見る。前半の二首は、自然に對するとき「實相に」觀入して先づするどく見つめ、そこに盛り上る感情を歌ひ上げ、後半二首は苛酷な迄に自らを批判し對決してゐる。故にすべて實感として讀者に迫り、第一首の鐵橋の下に咲く花の姿さへはつきりと想像出來るのである。私自身の考へでは、この花は谿間に咲く百合の花のやうに思へ、その風情がありありと目に浮ぶのだ。ふり返つて茂吉の歌から通草の花を想像してみよ。通草の花を知らぬ人に、この歌からはつきり、花瓣の形を心に浮べることが出来るだらうか？ 一首を對象してみてもかくの如きである。ここに始めて永年歌人が理想した境地の見事な完成を見、明治以後の短歌に感じた。作者個人の獨善的つぶやきと思はれないわけにはゆかなかつた歌境を押し進めて徹底境に漕ぎついたといふ満足感を覺えるのだ。

しかしこの劃期的な論も理解する人は少なからう。悲しむべきことには、短歌はアララギの奇怪なる現實主義の擡頭より次第々々に正道を逸脱して詩人を抹殺し、遂に歌壇を詩情の何ものたるかも知

さざめきがひろがる。それに答へるかのやうに少女は淺くまごつた瞳に笑みを浮かべやうとするのである。次に頬で笑みかけやうとし、奇妙なかたちに片手を上げてあらぬ方へ悲しい應答を送る。そこまでくると觀衆はそれの拍手を、思ひだしたやうに彼女へ投げあたへるのである。

私はその少女の統一のない微笑について考へたい。彼女の宙に浮いてしかも浮かびきれないやうな笑み、——これこそ奴隸の微笑にちがひない。人は顔面の筋肉の操作だけで笑へるものではない。心をしばり上げられた少女が強ひて笑みをたたへやうとしても、所謂彼女の顔には暗い影が生まれるにすぎないのだ。筋肉の惡戯によつてできた幾條かの皺とも見えるこの微笑は決して美しくもなければ樂しさうでもない。洞窟に刻まれた古代人の戯畫よりもこはばつた彼女の笑みの背後に、私は別の一人の人物を見つけたらなければならないが、これは淋しいことである。黒幕のかけにねそべつてゐる人物のために二十才足らずの少女は、次に梯子の上で細い脚を曲げ、手を前について逆立をする。ついで彼と彼女を乗せた梯子は、神の意志にでも動かされるやうに廻轉を始める。猿のやうに背をまげ梯子にぶらさがり、あるひはかぶさるやうにして反動をつけその廻轉をはやめてゆく。髪をうしろになびかせながら、紅白の旗をかざして廻轉するこの風景が、スポーツのもつ明るさとは眞反對な暗さを及ぼすのは一体どうしたわけであらうか。これは實にのがれることの出來ない暗さだ。おそろしくこの暗さは服飾のあくどさの故でも、天幕を洩れてくるしめつばい梅雨空の罪でもないであらう。彼等アクロバット達の不幸は「踊らされる」ことから始まり、また

それに終はるのだ。最初からの豫定された演技のくりかへし、主体性を失つた行動の連続、そしてその背後にひめられた不連続の鍛練。大衆は彼や彼女の淺薄な天鵞絨の色彩に對してでも拍手を送ることを忘れず、またしなしたとされる竹竿の上を、下駄履きて渡りしりぞく白痴的な少女の微笑にさへ共感出来るであらう。ある時は低俗野卑に熱狂するかと思へば、端坐し、二合七勺の詩念に没入する、との出来る大衆にはかならずこの悲壯な下駄履きの少女と相通する奴隸の意識が潜在してある筈である。このやうな民衆に賞讃を受けるためには、いま竹竿の上で少女がやつてゐるやうに、扇子を捨て、帶をとぎ、着物を一枚宛脱いで行つてもよからう。またマネキンのやうに手を上げて一時の静止を保つことだけでよいかも知れない。しかし拍手の數でアクロバットは悲しい満足を抱くとしても、彼女の奴隸性はそれによつて越はれるものではない。アクロバットの本質へ通ずる道も、民衆へ通ずる道も決してそのやうなところにはないであらう。

話はややそれるが、近藤芳美はアクロバットが嫌ひらしい。私もまた氏と同じくアクロバットを嫌惡する一人である。(あるひは、ありがたい。)特に括弧をまうけて「ありがたい」と言はなければならぬ。すでにアクロバットの一人であるかも知れない私自身を思ふとき、この括弧はやむなく必要となつてくるのだ。元來アクロバット acrobat といふ單語は、輕業師、曲藝師、綱渡り、とんぼがへりの曲藝師、あるひは主張、政見、理論などを常に變へる人、即ち豹變家といふ二通りの意味を含むものであるらしい。このやうなところから近藤はアクロバットを嫌ひ、「心理のアクロバット」といふ

熟語をもつて、新しい(所謂モダニズム、藝術派、それに戦後の反アララギ的新人をふくめての)短歌を否定すると言ふのであるが、そんな初等數學のやうな角度から、アクロバットを眺めても興味はなく、それよりもむしろ定型と歌壇の裂目に陥り、中世的鍛練道の手工業性にとりつかれた歌人と、彼等の奴隸的な微笑の空白さ對して私は興味を抱くのだ。やや飛躍した言ひ方になるが、「今さら新人でもないですね。僕だつてもう二十年やつてゐるし、その間に出來た歌風は……。」と語る近藤その人が、私にはアクロバットの典型に見えてならないのである。二十年といへばポール・ウアレリーが豊后勉勵した期間に相當するのであるが、その長いあひだ綱渡りの鍛練をしなければならなかつたさこの氏に對して、深い同情をささげると共に、暗い歌壇にむかつて烈しい呪詛の言葉を投げたい。たとへ「青春の恢復」といふやうな言葉が、今更美しくかかげられるとしても、すぎ去つた時間を時計の針のやうに逆行させることは不可能にちがひない。

なるほどモダニスト達のはかない機智と、あの少女のあやふい所作とはたしかに似てゐる。しかしそれ以上にアクロバットは私にとつて暗示的であり象徴的である。藝術派の人人や、反アララギ派歌人の代名詞である前に、アクロバットといふ單語は傳統短歌作者に適合する言葉だと言ふことが出来るのである。特に鍛練のために貴重な生命をすりへらしてゐる亞流歌人を眺めるとき、私はアクロバットの微笑が聯想に上つてきてたまらないのだ。短歌の亞流性と亞流歌人の奴隸性の底を貫流するアクロバティックなものか批判の對

(以下十七頁下段へ)

ゆすらうめ 山口 實

富士川の朝をみなかみに漂へる霧にはつかに差す日ざしな
戀ふらくも男ごころはおほらかにふりさけにけり雲とぶ富
士を

霧の中にうかべる山は朝ながらいつか嶺も乳色なるよ
立ちどまりかへり見るとき潔し陽をはぢきたてるふとき権
の樹
心ほぐるるおもひに暮れの逢ふ日またかくし晴れつつ静か
にあれな
ほのかにもおもかげのたつゆふべにてゆすらうめ目の前の
籠にあふる
ひとと別れてうらさびしきに公園のくらがりの中に噴水は
見ゆ
たそがれの校庭に來つ童貞にきほひをりし日のあざけなき
幸

炎の中の鐵はやけつつ紅色はすでに過ぎゆけば慣ほろしも
雷車去りたるあとの舗道は藍いろの底びかりする色を帯び
つつ
春書を妻抱かなとかへりゆく友の言葉はあざやかなるも
レヂスターの音にぎわめく茶房よりたばこ吸ひつつ木蔭に
入りつ

眩 光 笹井善治

夢みがちの若き想ひは芳香をたちみなざらし朝を進める

倫落のみだら歌唄い呆けつぎし夜よりぬけ來よ清き肉體
張りつめて日々は生きなん國破れひからべごじめつげど春
は花咲く

戸外より春咲きつぐる花々は集めつくさん心のたかぶり
きらめける光彩なしかがよへば花葉わかれず陰影なして美
しき
眞剣な言葉はびつたり心臓の奥深く刺さり嘘ひちぎられる
再びは必ず起たん次の世の子らよと言ひて額髪なずる
きらきらと光り眸に入り來たれり淫に濡れし想ひ投げうつ

○ 山下富子

何故かうも卑屈になるかあぢさゐのゆるるかたへにくづを
るるなり
卑屈には生きる勿れとかへりみし童のまみによろめきにけ
り
ひとすぢに美しく生きよと頼よせて幼き子を抱きしむる
なり
水汲むとかがめば顔がゆれ動き一枚の葉が青くうつれり

○ 吉井香代子

ゆらゆらと湯の香すがしみ草風呂にやすけき夕の息つぎに
けり
太陽は赤く回轉りて夕づけば白痴の如く吾も野に舞ふ
やせこけし兄の脊中を撫ぜさすりしきりに何故か涙こぼし
つ

どん底のたつきにあへぐ日日を父よ母よと叫びつゝ生く

青葉に棲む 塚本慶子

ひしめきて空を過ぎゆくものあればはや妻となりて青葉に棲まふ
花柘榴空ににじめる夕明りあゝけふもかくうたかたならず
石鹼の泡淡々と光りてうすらにかなし妻となりぬる
人妻となりていく日か夕かげに紫陽花の色いまだ穉く
君が眸に觸れたる晝のたまゆらをすすめてすぎぬ青葉つばくら
紫陽花のめぐる七耀官能もうちひらけよとあるひけ敲く
味爽時計の音にうつうつと吾も鳥も花も夏天に刻まれゆけり
撰ばれて恍惚と倚るある時の花々よクレオパトラのごとく
涙もなきかなしみの地を這ひゆきて木に寄れば眠る蝸牛のごとし
人夢の花おとろふる日盛りもち場ぐるわれの夢明かれよ
逐はれつゝなほもうたひしかなしみの響りいでよ再た青葉の中に

暹 日 北川和歌子

野育ちの少女の唇かぐみ朱にきはだつ時し雑念もなき
はるばると空の深みに伸びゆきて陽にとぎすます葉すがしむ

いきもののかなしみ深き眼にうつりひろがる朝の碧ふかき空
花飾る心も失せしすなほさに白いハンケチをしぼしぼとり出す
面伏せてつぶやくころを斜なす夕陽の街の影と光や
花のごとくこころ匂ひて結ぶべき春もをはりの眞書野の夢
いはけなきいのちはぐくむ鳥ありてかなしき聲を聞かすひねもす
濁り水を夕べ泡立て湧くごとく生るいのちかなしく思ほゆ
愛憎の心いだきて夕見れば水泡立ちてひかるさざなみ

夏 來ぬる 壺中清市

春おそく妻を迎ふる日となりてけしきばみたる山を愛せり
にひむろに妻を迎ふる朝にて父母笑ますも多く語らず
藤の花山にいだれて咲く今日を夫をなるとなりあなさやけかる
白き薔薇こよひ咲けるを見たりしがひしと抱けば吾妻かなしも
われつひに夢見はてぬと思へども夢さらに濃き夏の短夜
嫁ぎきし君を思へばあれ吾があまりに小さき夢なりしかも
妻ときて眼は嵐山の上にある夏雲戀へりやや疲れつづ
初夏の空にうつれる影さやけ青葉の下を妻と行きたり
麥わらの煙かげなす黄昏の野を見て立てば妻のうるはし
その肌の青くすきゆく夜半なれば枕べに來てにほふ螢ぞ
盛り花の野蘇の花はまろけき妻の肩にし寄りて愛づべき

或時の立居われならず氣疎しとこのくらきへやゆきかへりする

このまづしき願ひを君のいれたまふゆとりありとはさらに念はねど
破れての後のおもひのはかなさはあらくさむらと目立たざりしも
うつくしきさまに住めどもひとことが直からじとていぶりも消えぬ
孤の想ひたへがたく雨に蔭殖えし部屋内にことし初の蚊つぶす
ほそぼそと縁雨しづけく降りそめて孤り過ぐれば音たになきを
きりの雨はれて清しき夕べなれしづくとどの薔薇きらむとす
ことさらに世をうとまねど世に遠くわが住みなして久しき日なり
空白く光りどぎつくよそほへる若き女等ちまたを行くも
きばみたる棟の枯葉落ちつくしみどりの中に巍巍と孤立すそゝりたつヒマラヤ杉のほの暗くしづもれる道ひとりなるかも
茜濃きばら咲きそむる庭に佇ち袴もとひそとあはせて見しも
手をつかね過せし報いははこぐさ生ひて佗びしさきはまりしかな

斜 陽 加藤英之助

暗き灯に今宵また書くわがうたの混濁とてひかりもあらず

(十四頁下段より)
象とすることから、われわれの第一歩はふみ出されなくてはならぬ。綱をななめにすべりおるときにも、アクロバット達には深い嘆きがあるだらう。しかし歌壇のアクロバット達は自分が何であるかをいまだに知らないやうに見える。

彼女自身で踊ることか覺えない限り、少女は自由な微笑をその頬にたへることが出来ないであらう。それと同じことがわれわれについても言へるではなからうか。鍛練道といふ堅實でありながらその反面非常にアクロバティックな性格をもつ創作態度から、自分をきりばなし、逆説めくが、アクロバットとも間違へられる程の獨創性を發見することに努力したものである。ところで歌壇には近藤の言ひ私の言ふ意味での二重のアクロバットも決してすくなくない。奴隸になり切つたその人達に、新しいはなれ業はこよなく美しく見えることであらう。しかし「新しさ」といふものはさういふ角度から狙ふことの出来るものではないと私は思ふ。このやうに考へてくると、三重四重のアクロバットの姿が目の前に浮びあがつてくるが、このアクロバットに共通した缺點は、あまりにも小範圍の生活體驗の中にあぐらをかいてゐるといふことである。われわれのやうに異常な時代に青春の形成期をすこす若い世代にとつて、これは第一に警戒しなければならぬことであらう、その上に立つて始めて可能性の追求といふやうな未來への旗をひるがへすことも出来るのである。(六・五)